

## 談 話 室

### 第 26 回日本眼科学会専門医認定試験を終えて

第 26 回日本眼科学会専門医認定試験は平成 26 年 6 月 13 日(金)、14 日(土)の 2 日間にわたり、昨年と同様、東京の渋谷駅前のフォーラム 8 で行われました。この場をお借りして、昨年 7 月から試験までほぼ 1 年の長きにわたりお世話いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

例年と同様に、今回の認定試験の概略とその結果、印象などについて報告させていただきます。

#### 1. 日 程

平成 26 年 6 月 13 日(金) 筆記試験(フォーラム 8)

一般問題：午前 9 時 30 分から 2 時間

臨床実地問題(視覚素材付き問題)：午後 1 時から 2 時間

平成 26 年 6 月 14 日(土) 口頭試問(フォーラム 8)

午前 9 時より口頭試問は受験者 1 名ごとに同じ問題を用いて個別に行いました。

#### 2. 受 験 者 数

受験申請の受理者数は 320 名、欠席者 4 名で最終的に受験者数 316 名でした。内訳は初回受験者 242 名(76.6%、男性 141 名、女性 101 名)、再受験者 74 名(23.4%、男性 50 名、女性 24 名)、勤務地の地域別には北海道 14 名、東北 13 名、関東甲信越 65 名、東京 53 名、北陸 11 名、中部東海 34 名、近畿 66 名、中国 16 名、四国 6 名、九州 38 名でした。昨年に比べ、受験者数は少し増えましたが、初回受験者の占める割合に大きな違いはありませんでした(昨年は 74.7%)。

#### 3. 問題数、平均点、合否判定、合格率

筆記試験問題は例年と同じく一般問題 100 題、臨床実地問題(視覚素材付き問題)50 題の合計 150 題、KV(key validation)委員会を開催し、正答率と識別指数を参考にしながら問題の妥当性を検討し 2 問題を採点から除外しました。昨年と同様に一般問題、臨床実地問題をそれぞれ 100 点満点として、両者の合計を加算して 200 点満点として採点しました。

採点結果を過去 2 年間のものと並べて表 1 に示します。

口頭試問については、例年通り試問前日に試問委員で実施手順の確認を行いました。試問当日早朝に実際の試問の提示を行い、問題内容、試問方法、合否判定基準について全員で検討を行いました。それぞれの口

表 1 筆記試験成績

回		一般問題 (100 点満点)	臨床実地問題 (100 点満点)	総合 (200 点満点)
24	最高点	95.0	90.0	181.0
	最低点	35.0	34.0	72.0
	平均点	68.4	66.9	135.3
25	最高点	89.9	90.0	175.9
	最低点	30.3	34.0	68.3
	平均点	65.5	64.2	129.7
26	最高点	89.8	96.0	180.7
	最低点	25.5	36.0	66.6
	平均点	62.3	73.7	136.0

表 2 最近 6 年間の初回受験・再受験別合格率

回	年	初回受験者	再受験者	総合合格率
21	2009	74.5%	45.2%	60.6%
22	2010	74.3%	23.2%	60.8%
23	2011	81.0%	56.9%	73.3%
24	2012	87.8%	56.9%	79.6%
25	2013	83.7%	28.8%	69.8%
26	2014	86.4%	37.8%	75.0%

頭試問は 2 名の委員で 1 つの班を作り、班ごとに会場を用いて、一人につき原則 15 分間を使って試問を行いました。試問終了後に両者が合議のうえ不合格判定検討対象者の選別を行いました。合否判定は試問翌日の 6 月 15 日(日)による各班の班長と試験委員会委員長、副委員長による判定会議を開催して行いました。口頭試問の問題の評価、各班の受験者の状況について報告を受け、それをもとに合否判定の基準の再確認を行いました。その後、口頭試問の不合格者判定検討対象者について、班長の報告を受け、全員で検討し、合否判定を行いました。最終的な合格条件は筆記試験が 200 点満点の 120 点以上、口頭試問で合格の両者を満たすことにしました。

今回は合格者 237 名、合格率 75.0% で、不合格者の内訳は、筆記試験不合格者 78 名、口頭試問不合格者 10 名、重複を除くと不合格者は 79 名でした。

#### 4. 初回受験者と再受験者

最近 6 年間の初回受験者、再受験者の合格率を表 2 に示します。

過去3年間は初回受験者の合格率が8割を超えていますが、今年も86.4%と高い合格率でした。一方、再受験者の合格率は37.8%と、第22回、第25回に次ぐ低いものでした。初回受験者のほとんどが、眼科研修プログラムの修了者であると推定され、本プログラムが一定の効果を上げていると思われます。

#### 5. 筆記試験問題

筆記試験問題の作成は、74名の出題委員に依頼、眼科専門医認定試験出題基準に準拠して各専門分野別に分け、一人あたり一般問題5題以上、臨床実地問題3題以上の作成をお願いしました。過去のストックされた問題とあわせて629題から選定を行いました。述べ6回にわたる選定とブラッシュアップが行われ、150題が作成されました。この間、担当委員の先生方には毎回2日間、ホテルに軟禁状態で作業を繰り返し行っていただきました。お忙しいなか、貴重な時間を割いてくださった先生方にこの場を借りて深く御礼を申し上げます。

#### 6. 口頭試問

口頭試問は11名の試験委員に2月に各人2題を目途に出題を依頼し、提出していただいた23題の問題をもとに後藤 浩試験委員会副委員長が2題作成し、委員長とともに最終案をまとめました。

問題1は帯状角膜変性、角膜ジストロフィ、角膜潰瘍、水疱性角膜症の写真を提示し、角膜疾患の鑑別診断の知識と、その重篤度の判断、角膜潰瘍の診断と治療のアプローチを問う問題。問題2は眼内レンズの偏位について、基礎知識と、治療法、合併症を問う問題でした。ともに実際に眼科臨床を行っていれば必ず回

答できるものと考えて出題しましたが、ほとんどの受験者が適切に回答できていました。口頭試問委員からは、良い問題だったという意見が大勢を占めました。回答できても用語の使い方が曖昧で、不適切な受験生が気になったという意見が出ました。また、差がつきにくい問題ではないかという意見も出ました。次年度への課題にしたいと考えます。

#### 7. 今後の試験のありかた

専門医試験は26回と回数を重ねています。日本専門医制評価・認定機構からも眼科の専門医試験は高く評価されていると聞きます。しかし、筆記試験の問題の選択にあたっては出題基準をもとに、できるだけ偏りがないようにしていますが、領域によっては良問が得られにくいことがあって、作問に偏りがあるかもしれません。また、口頭試問の作成方法、口頭試問のありかた、合否の判定方法など、さらに検討を加えていく課題があると考えます。試験委員の間でも眼科専門医試験において何をどう問うべきか、常に議論になっています。第13回から第23回まで試験委員、第24回と第25回は村上 晶委員長のもとで副委員長を2年間、今回は委員長と、試験委員を合計14年間務めさせていただきました。残された1年間の任期を、最後のご奉公の気持ちで臨みたいと考えています。まず平成26年7月6日(日)に若手の試験委員を対象にして、試験問題作成ワークショップを開催させていただきました。この場をお借りして、お世話になっている関係するすべての先生方と、日本眼科学会事務局のスタッフに心から御礼申し上げます。